

大會抄錄

鄭の始封・東遷をめぐる

松井嘉徳

周厲王の子、宣王の母弟（庶弟）桓公友は、宣王三二（前八〇六）年に鄭に「封」ぜられ、三十三年後に幽王により司徒に任ぜられた。時に王室は褒姒の爲に亂れ、「東徙」を謀った桓公は虢・鄭より十邑を獻ぜられ、その地に「國」した。桓公自身は幽王一（前七七）年に幽王とともに犬戎に敗死するが、その子武公掘突（滑突）が即位し、平王の東遷に際して重要な役割を果たした。

『史記』の傳える鄭の始封・東遷の事情は以上の如くである。その眞偽をめぐる論争は以後絶えることなく繰り返されるが、その論點は『左傳』『國語』『史記』『竹書紀年』等々の諸史料のうち、いずれの記述を重視するかという一點に還元しうるものであり、現在もおその結論を見出せないという事實そのものが、この論争の方法上の限界を示している。

本報告では、從來の論争とは視點をかえ、『史記』の内容引用中に傍線を附した「封」と司徒との關係の分析からこの問題を考えてみたい。司徒（嗣土）の官名は西周金文にも見え、王朝の執政にあたる地位の官であり、更に『左傳』に據れば桓公に次ぐ武公・莊公も王朝の卿士であつたとされる。「王官」としての傳承を持つ鄭が「封建」諸侯として扱われるこの斷絶に、鄭の始封・東遷をめぐる

論争の眞の發端があると考えられるのである。またこの分析を通して、西周期から東周期への變化の一端を窺うこともできるのである。

吳・南唐政權の性格

——その地域支配を中心として——

伊藤宏明

唐宋五代期における江淮の政治・社會状況を明かにする上で、吳・南唐王朝に關する研究は缺くことのできないものである。以前よりさまざまな分野の研究がなされてきている。

とくに政治史の分野では、吳から南唐への政治的な展開を、武人層による藩鎮的な軍事支配體制を克服して文治主義的な集權官僚體制を確立していく過程として從來から理解されてきたように思う。こうした見通しのもとに、本発表では、とくに吳・南唐政權による地域支配の問題を取り上げてみたい。というのは、兩政權下における地域支配の分析をすることが、吳・南唐國家のもつ公共的な性格を考える上で重要な視角になると思うからである。ここである地域支配とは州縣段階の支配を示す。

唐宋、黃巢の亂などによって荒廢した江淮社會を如何に再建しようとしたのか、あるいは江淮社會がかかえもっている流民、少數民族問題などさまざまな矛盾を如何に克服しようとしたのか、またそこに住む民衆の意思を如何に地域支配の中に反映させようとしたのか

か、等々の點について考えてみるつもりである。
 こうした吳・南唐政權による地域支配の分析を通して吳・南唐國家の性格の一端に迫りたいと考えている。

元朝屯田考

大島 立子

モンゴル軍は、華北を侵略した當初より、屯田を設營しはじめ、元朝では金朝と同様に邊境のみならず、ほぼ全領域に屯田を設置した。それを管轄する機關も、軍政をつかさどる樞密院だけではなく、大農司、中書省、行中書省など多くあった。その設置目的は、直接的には、(1)邊境防衛、(2)軍餉確保、(3)荒地開發が挙げられ、間接的には貧民の救済、不穩分子の監察の役を果していた。

(1)・(2)のような純粹に軍事的な目的をもって設置されたものは多い。金朝、南宋朝攻略中に臨時置かれたもの、あるいは北邊、西邊、南方の邊境の地にあったものが、それである。

本來的には屯田設置は、軍事的要素の強いもののはずであるが、元朝にあつては、第三の荒地開發を目的としたものも無視できない。その多くは、金末の動亂期に荒廢した農地の再開發を理由に設置され、従つて、多くは河南行省にあつた。ほかに腹裏には、モンゴル軍隊に付與された屯田があつた。

本報告では、以上のような各種の要素を持つ元朝の屯田を検討し、それが元朝の漢人統治においていかなる機能を持っていたかを

考察したい。

『耕織圖』の流傳とその影響について

渡部 武

中國では古來爲政者は農本主義の立場をとり、その思想を體現するため好んで農桑をテーマとした繪畫が描かれてきた。ことに宋代においては杜瑄の『農器圖』、曾之謹の『農器譜』、樓璣の『耕織圖』など、農業技術史上重要な圖録が描かれたが、残念なことにいずれも亡佚して傳わらない。しかし、それらは後世の農書に大きく影響を與えており、王禎の『農書』や徐光啓の『農政全書』の挿繪中に繼承されている。また『耕織圖』については、その後多くの摹本や版本がこしらえられ、朝鮮および日本にも傳わり、それぞれの國の畫壇や農學に深く影響を及ぼしている。わが國においては室町末期に宋畫系の『耕織圖』が傳わり、狩野派の畫家によつて一派の粉本の一つにされ、寺院や豪農の家の襖や屏風に實に多くの『耕織圖』(とくに耕圖)が描かれていく。織圖も養蠶技術書誕生の一助となり、『耕織圖』が後世に及ぼした影響は甚大である。私は數年來、各地に傳存する『耕織圖』を探索し、資料の収集に努めてきた。その結果、從來未紹介の新資料の發見もあったので、それらの資料の一端を紹介しながら、あわせて『耕織圖』流傳の意義を考えてみた。